頭に血がのぼったときゃ2つのことに走る。その2つ目ってのは殺しだ。

THE POSTMAN ALWAYS RINGS TWICE

ジャック・ニコルソン
ジェシカ・ラング
ジョン・コリコス／マイケル・レーナー
ジョン・P・ライアン／ウイリアム・トレイロー

製作 アンドリュー・ブラウンスバーグ
監督 ボブ・ラフェルソン
脚本 デビッド・マメット
原作 ジェームス・ケイン（新潮文庫）
撮影 スヴェン・ニクビスト
音楽 マイケル・スモール

〈カラー作品〉アメリカ映画
日本ヘラルド映画

Herald

郵便配達は二度ベルを鳴らす

追いつめられた男と女の、激しい情欲を美しいカメラワークで描く話題作！

1930年代、不況の長びくアメリカを背景に、追いつめられた男と、行き場のない女との絶望的な、しかし甘美な情交を描く人間ドラマ。

ジャック・ニコルソンと**ジェシカ・ラング**の２人の主演俳優による火花散る〝芝居〟と、まさに肉と肉とをぶつけあい、きしみ合わせるという感じのラブシーンがセンセーションを呼んだ、アメリカ映画の秀作である。

原作は1934年に発表された**ジェームス・ケイン**の同名の小説。不況時代の、失業者の男の暗い欲望をリアリスティックなタッチで描いて、評判を呼び、大ベストセラーとなった。やがてこの小説は、ハードボイルド小説の元祖という名誉を獲得して、しだいに名作の列に入っていく。つまり〝男〟が、〝女〟が、鮮烈に描かれていたのである。

映画化は、ルキノ・ビスコンティの処女作を含めて４回目。しかし過去３回のいずれもが原作のもつ、凄みには遠く欠け離れていて、今回こそが、その表現の激しさにおいてもっとも原作に忠実であり、そのエッセンスを伝えるものと、評価されているわけである。

キッチンテーブルの上でのセックス・シーン。これが全米を轟々たる賛同と非難を巻き越した。

不況時代の蔓延する30年代、ロスアンゼルスから南へ下るハイウェイ沿いにガソリンスタンドを兼ねる安食堂があった。経営者は中年のギリシャ人のパパダキスだが、その女房は彼に命を救われたことがある、というだけで一生を縛りつけられている若いグラマーな女だった。女は頭がクラクラするほどの熱気の中で、肉体も心も、もてあましていた。

そこにある日、尾羽打ち枯したという格好の男がフラリと立ち寄る。身なりはみすぼらしいが、眼だけはギラギラと光っていた――。

彼は予想されたように前科者だった。

やがて、男は、たまたま探していたメカニックとして、ガソリンスタンドで働くようになる。食事付日給８ドルという条件で。その食事というのはいうまでもない、若い女房がつくるものであった――。

男と女が亭主の目を忍ぶ仲になるのはそんなに時間もかからなかった。そして、お定まりのごとく、亭主が邪魔になっていく――。

ニコルソンとラング、そして、ボブ・ラフェルソン監督。このトリオが「郵便配達」をつくった。

男、ジャック・ニコルソン、女、ジェシカ・ラング。アメリカ映画界のリーダーたる風格を身に備えてきたニコルソン、久しぶりの当り役。そしてニコルソンに演ずる流れものに〝男〟を発見して情欲のすべてをぶつけていく女は、凄じいボリュームの肉体をたっぷり見せつけて熱演する「キングコング」のジェシカ・ラング。

監督は10年前、ニコルソンの出世作となった「ファイブ・イージー・ピーセス」で彼と組んだボブ・ラフェルソン。AIP出身の気鋭の監督の10年の沈黙を破る傑作。脚本は新進の劇作家、**デビッド・マメット**、撮影はスウェーデンから呼び寄せた**スヴェン・ニクビスト**。「秋のソナタ」、『フェイス・トゥ・フェイス』でイングマール・ベルイマンと組んだ名手。音楽は**マイケル・スモール**。

＊　＊　＊

ジャック・ニコルソン／ジェシカ・ラング
ジョン・コリコス／マイケル・レーナー
アンジェリカ・ヒューストン
製作アンドリュー・ブラウンスバーグ
監督ボブ・ラフェルソン／脚本デビッド・マメット
原作ジェームス・ケイン（新潮文庫）
撮影スヴェン・ニクビスト／音楽マイケル・スモール
〈カラー作品〉アメリカ映画／日本ヘラルド映画

Herald THE POSTMAN ALWAYS RINGS TWICE

郵便配達は一度ベルを鳴らす

11月28日（土）より'82新春先行ロードショー

伊勢丹前 シネ・タウン
新宿ビレッジ２ (351) 3129